

## 復活節第2主日 (神の慈しみの主日) ヨハネ 20:19~31

先週の復活の主日の福音は、復活の朝の「空の墓」の物語が朗読されました。第2と第3の主日には「復活したイエスが弟子に現われる」場面が朗読されます。今日の復活節第2主日は毎年同じヨハネ20章の個所で「週のはじめの日(安息日の翌日)の夕方」と「その8日後」に2回にわたってイエスが弟子たちに現われる場面が朗読されます。前半は、初めて弟子たちにイエスが現われた場面ですがトマスだけはいませんでした。後半は、もう一度トマスのために現われる場面です。

前半は、まだ恐れて途方に暮れていた弟子たちにイエスが現われる場面です。「ユダヤ人を恐れて家の戸を閉めていた」とあります。弟子たちはただイエスを失って悲しみに沈むだけでなく「自分たちもつかまって殺されてしまうのではないか?」と恐れていました。恐れてびくびくしている弟子たちにイエスは一言「あなた方に平和があるように」と声を掛けます。この「平和」と訳されている言葉はヘブライ語の「シャローム」。日常よく使うあいさつの言葉です。イエスは、きっとこの簡単な言葉で弟子たちを落ち着かせたかったのでしょうか。けれども、この言葉だけでは弟子たちの恐れは解消しなかったでしょう。なぜなら、弟子たちにはイエスを置き去りにしてしまった負い目があったからです。ルカ福音書24章では「弟子たちは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った」とあります。弟子たちのうろたえぶりはよほどのものだったでしょう。そんな弟子たちの心を見透かして、イエスは十字架で受けた傷を見せます。この傷は、弟子たちにとって目をそむけたくなるものでした。自分たちが逃げ出したから、与えてしまった傷だからです。けれども、イエスが生傷を見せたのは“咎めるため”ではなく“赦していることを分からせるため”でした。イエスが釘跡を見せたのは「平和」に「ゆるし」を添えるためでした。「あなたたちは逃げてしまったけれど、もう気に病むことはない。それより、私から受けたゆるしを人々に伝えなさい」と送り出します。この切り替えの早さは、キリスト教の特徴でしょう。罪人だと自己嫌悪に陥っていた自分がゆるされる。そしてすぐに派遣されて行く。「今受けた恵みを人に伝えなさい」と送り出されていきます。

次は、後半のトマスの話です。トマスは、復活したイエスとの大切な出会い、ゆるされて生まれ変わる蚊帳の外にいました。皆さんは、トマスは、どんな人間だったと思いますか? 他の弟子たちの言うことを信じられない、不信仰な人間だと思うのでしょうか? 確かに、弟子たちの言葉をそのまま受け入れられたら模範的だったでしょう。けれども、納得もしてないのに、信じるふりをする、口を合わせてその場をやり過ごすのは不誠実な態度でしょう。トマスは、自分の思っていることを素直に表現できる誠実な弟子だったと思います。このトマスの態度を私たちに応用してみると次のようにも言えるでしょう。私たちの中にも、信仰の面で飲み込みが早い人も遅い人もいます。みんなが納得しても、自分は未だという人もいます。トマスは、他の人たちよりも合点がいくのが遅くて、みんなが痺れを切らす頃になってやっと実感する奥手のタイプだった。そんな奥手なトマスの特別な望みにイエスは応えてくれました。イエスは、トマスのように特別に遅いタイプの人にも愛情をこめて現されてくださいます。私にも復活のイエスが現われて下さったと実感できるタイミングには、遅い早いがあるでしょう。今年は、新型コロナウイルスの影響で復活祭の喜びも感じにくくなっています。でも、必ずイエスは現われてくれる。そのことをトマスの物語から読み取ることもできるでしょう。イエスはタイミングを見計らっておられるのでしょうか。

主は恐れから解放してくださる、負い目をゆるしてくださる。そして、遅くなっても必ず現われてくださる。この信仰を新たにしましょう。「確かに主は復活された」と感じられたらその喜びをすぐに伝えにいきましょう。